

# 「保育・教職実践演習」における授業内容の検討(1)

— 小学校体験活動における学生の振り返りの分析と検討から —

山本 淳子

## 1. はじめに

### (1) 「保育・教職実践演習」の位置付け

本学の授業科目「保育・教職実践演習(幼稚園)」は保育士資格取得における「保育実践演習」(児童福祉法施行規則第6条の2第1項第3号の指定保育士養成施設の修業教科目及び単位数並びに履修方法)、及び幼稚園教諭2種普通免許状取得における「教職実践演習」(教育職員免許法施行規則第6条、表第6欄)に示される科目である。いずれも同様に就学前の幼児を対象とするのであるから、本学の「保育・教職実践演習」は保育士養成課程と幼稚園教諭養成課程に関わって共通に開講している科目として位置付く。筆者は幼稚園教育実践に関わる内容について担当し、もう1名の教員は保育士養成に関わる内容を担当、更に現場経験のある外部講師が実践についての講演を行う等、オムニバス形式で授業を展開している。

筆者の担当する幼稚園教諭2種普通免許状の取得に関しては、2006(平成18)年に「教職実践演習(仮称)」の新設、必須化が文部科学省(以下:文科省)によって示された。科目の趣旨・ねらいとして「教職実践演習(仮称)は、教職課程の他の授業科目の履修や教職課程外での様々な活動を通じて、学生が身に付けた資質能力が、教員として最小限必要な資質能力として有機的に統合され、形成されたかについて、課程認定大学が自らの養成する教員像や到達目標等に照らして最終的に確認するものであり、いわば全学年を通じた『学びの軌跡の集大成』<sup>1</sup>と示されている。

学生は本科目の履修を通じて、将来、保育者になる上での自分の課題を自覚し、知識や技能等を補い、その定着を図ることにより教職生活をより円滑にスタートできるようになることが期待されているのである。そのための方法の一つとして、学生生活での今までの学修全体を俯瞰するために「保育・教職実践演習カルテ」を記入する。保育・教職に関する科目の履修状況や評価等を通して、保育・教職を目指す者に必要な望ましい資質能力の目安の各項目について自己評価して振り返り、その上で自己の課題を記入する。保育者と

して養成校で身に付けなければならない今後の課題を省察するシステムを持っている。

文部科学省では科目の趣旨を踏まえて、教員として求められる 4 つの事項として

- 「1.使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項
- 2.社会性や対人関係能力に関する事項
- 3.幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項
- 4.教科・保育内容等の指導力に関する事項」<sup>2</sup>

を含めることが適当であるとしている。それに沿って本学では保育士養成と教員養成の両方を行うことから、厚生労働省の示す「保育実践演習」等の内容も踏まえながら本科目の 2019 年度シラバスに示した授業の概要、目標は以下の通りである。

表 1. 「保育教職実践演習シラバスの抜粋」<sup>3(注1)</sup>

授業の概要	保育者として踏み出せるように、これまでの学びの理解度と技術力を踏まえて実践的能力を向上するための演習授業である。ゲストスピーカーの講義を聞いたり、ロールプレイング、小学校教育支援活動体験を行ったりする。また、保育現場での保育記録や書類作成など就業を見据えたより実務的な視点からの講義や演習を行う。グループ協議を通してチーム保育者として保育に取り組む姿勢を養う。
授業のテーマ及び到達目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保育現場の今日的課題を具体的に知る。</li> <li>・保育者の職務に対する理解を深める。</li> <li>・保育実務について概要を知る。</li> <li>・チームで解決するなど、保育における課題解決能力を高める。</li> <li>・様々な保育方法に触れ、保育内容を創造する姿勢を身に付ける。</li> </ul>

## (2) 学びに求められる事

### ① 本学の教育目的、3 つのポリシーの視点から

表 2 「幼児教育学科(2019 年度生用)教育目的」は 2 年間の短期大学生活での本学の教育目的である。なお、後ほど報告する教育実践は 2018 年度入学生の実践であるが、教育目的は 2018 年度も同様である。教育目的が本実践に関わると思われる部分に筆者が下線を引いた。

表 2 「幼児教育学科(2019 年度生用) 教育目的」<sup>4</sup>

<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 建学の精神であるキリスト教と高い倫理観、職業に対する使命感に基づき、愛をもって子どもや人々に奉仕できる人材を育成する。</li> <li>2. <u>社会人としての教養と対人関係能力に基づき地域の人々と協働し、他の学生と協力して物事を成し遂げることができる人材</u>を育成する。</li> <li>3. 保育学・教育学・福祉学の基礎知識と学問的探求方法の理解に基づき、乳幼児に関する知識と保育方法理論を理解して、<u>変化する保育ニーズの中で自己の保育を改善することができる人材</u>を育成する。</li> <li>4. <u>一人ひとりの子どもの心によりそい、保育を構想してクラス集団を指導し評価することができる保育実践力を備えた人材</u>を育成する。</li> </ol>
---

また本学で示されるアドミッションポリシー（入学者受け入れの方針）、ディプロマポリシー（学位授与の方針）、カリキュラムポリシー（教育課程編成・実施の方針）の三つのポリシーのうち表3ではディプロマポリシー、及びカリキュラムポリシーを示した。カリキュラムポリシーは本学の教育目的に基づき、学修成果の目標とも言えるディプロマポリシーを達成するための、具体的な教育内容・方法を示した基本方針である。つまり本学の保育者養成では、上記に示した具体的な教育目的に示される姿や、ディプロマポリシーの示す人材育成の方向性を目指しながら保育者養成を行っている。カリキュラムポリシーは当然ながら「保育・教職実践演習」のシラバス作成の根幹になっているのであり、シラバス作成や本論文で報告する教育実践の展開はそれらを十分に踏まえて具現化していくことを心掛けている。また、既述の文部科学省による、教職実践演習の科目の趣旨を踏まえた教員として求められる4つの事項と本学の教育目的との対応では、「1.使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項」は本学の「幼児教育学科(2019年度生用) 教育目的」(表2)の「1」に対応できる。同じく「2.社会性や対人関係能力に関する事項」は本学教育目的「2」、 「3.幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項」は「4」、「4.教科・保育内容等の指導力に関する事項」は「3・4」に相応すると捉えられる。

表3 「ディプロマポリシー、カリキュラムポリシー」<sup>5</sup>

<p>ディプロマポリシー</p> <p>本学の見学の精神・本学科の教育目的に基づくカリキュラムを履修し、以下の資質を養い、所定の単位を修得した場合は、卒業認定し短期大学士の学位を授与します。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 自己を確立し、社会に貢献する意欲を持つ。</li> <li>2. 職業的倫理観を基礎として、乳幼児や人に対して愛をもって関わるができる。</li> <li>3. 乳幼児の成長を支援するために必要な幼児教育、保育、福祉の専門的知識と技能をもち実践できる。</li> </ol>
<p>カリキュラムポリシー</p> <p><b>【教養基礎科目】</b></p> <p>本学の建学の精神を学ぶ「聖書と現代人」を全学共通の開講科目とし、広く人間と社会に関する教養を学びます。豊かな人間性を培うための交流共感の場を学外に求めて、「ボランティア論」およびゼミナール活動等では地域社会への貢献として様々な活動への参加も積極的に推奨しています。</p> <p><b>【専門教育科目】</b></p> <p>学科の教育目的を達成するように、社会貢献できる人材育成と保育者養成を目指して教育課程を編成しています。幼稚園教諭二種免許状・保育士資格・社会福祉主事任用資格を取得できます。自立する姿勢を身につけ、自分で考え、判断し、行動する保育者を目指し、2年間で段階的に成長できるように理論科目、実践科目を構成しています。</p> <p>さまざまな教育活動を通して、学生が主体的に学びのテーマを選び取り深化させるため、地域社会に関わる中で、学び貢献します。また、教職・保育士養成に係る補完的教育や対策講座なども開講しています。</p>

## ②授業方法・内容の視点から

文科省では上記の教員として求められる 4 つの事項に加えて、「企画、立案、実施に当たっては、常に学校現場や教育委員会との緊密な連携・協力を留意することが必要である」<sup>6</sup>等、授業内容の工夫や連携から教職生活を円滑にスタートすることが目指される。さらに授業内容例として、子どもと直接かかわりあう体験、教員が担う重要性を理解する、現地調査(フィールドワーク)、社会人としての基本(挨拶や言葉遣い)、地域との連携協力の方法が身に付いていること、等が例示されている。文科省が示す「教職実践演習(仮称)」での授業内容の持ち方に沿って養成校においては授業内容の創意工夫が目指されるところである。

また目標到達の確認指標例として、

- ・ 自発的・積極的に自己の職責を果たそうとする姿勢があるか。
- ・ 自己の課題を認識し、解決に向けて自己研鑽に励む姿勢を持っているか。挨拶・服装、言葉遣い、教職員への対応などが身についているか。
- ・ 気軽に子どもと顔を合わせたり、相談にのったり、親しみを持った態度で接することができるか。
- ・ 社会状況や時代の変化に伴う課題や子どもの変化をすすんで捉えようとする姿勢を持っているか。

(以上一部抜粋)等が示されている<sup>7</sup>。幼児教育に携わろうとする学生において、幼児期を中心に未就園児の時期、初等教育の時期とその発達の過程を把握できていることは自明の事項である。小学校体験活動では小学校現場での参加体験によって、取り上げた文科省の示す内容についての目標の到達が期待できる。

## ③幼稚園教育要領における幼小の接続について

2017(平成 29 年)の幼稚園教育要領は、中央教育審議会答申 2016(平成 28)年を踏まえて、幼児教育において育みたい資質・能力の明確化、小学校教育との円滑な接続を重視した幼稚園教育の充実、教育課程に係る教育時間の終了後に行う教育活動(預かり保育)、いわゆる預かり保育の充実<sup>8</sup>などが改訂の基本方針になっている。そもそもわが国の教育の課題は「生きる力」を育成すること(2008(平成 20)年中央教育審議会答申)、つまり「確かな学力」、「豊かな心」、「健やかな体」の知・徳・体をバランスよく育てることである。この度の平成 28 年中央教育審議会答申において、時代の流れの中にあって変化の多い未来社会を生きるために必要な更なる力を考慮して、「生きる力」を捉え直す検討がなされた。そこで「生きる力」の育成に必要な以下の資質・能力が明示されたのである。幼児教育の視点から捉えると、資質・能力は小学校との円滑な接続のために子どもの発達や、小学校教

育との学びの連続性を見通すものである。表 4 に、幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領、保育所保育指針及び小学校学習指導要領における資質能力を示すが、幼児教育と小学校教育の連続性が見てとれる。

今回示された幼児教育で育成すべき資質・能力を幼児の生活する姿から捉えたものが、健康、人間関係、環境、言葉、表現の 5 領域の枠組みである。これらは幼児の様々な体験によって、相互に関連を持ちながらねらいが達成されていくのであり、主に遊びを通して総合的な指導を行うなかで一体的に育む点は従来の保育内容や保育方法と変わらない。また表 4 に示す、育みたい資質・能力の三つの柱を踏まえつつ、5 歳児終了時までまでに育ってほしい具体的な姿を明らかにしたものが「幼児期のおわりまでに育ってほしい 10 の姿」であり、小学校教師との共通理解が求められている<sup>9</sup>。

**表 4 幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育保育要領、保育所保育指針及び小学校学習指導要領における資質・能力**

	幼稚園教育要領 <sup>10</sup> ・保育所保育指針 <sup>11</sup> ・ 幼保連携型認定こども園教育保育要領 <sup>12</sup>	小学校学習指導要領 <sup>13</sup>
育みたい 資質・能力	<ul style="list-style-type: none"> <li>・知識及び技能の基礎。</li> <li>・思考力・判断力・表現力等の基礎。</li> <li>・学びに向かう力、人間性等。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・知識及び技能が習得されるようにすること。</li> <li>・思考力、判断力、表現力等を育成すること。</li> <li>・学びに向かう力、人間性などを涵養すること。</li> </ul>

## 2. 問題の所在、研究の目的と仮説

「保育・教職実践演習」では、以上のような本学の教育方針の方向性、及び保育、教育の現状を踏まえながら、現代的な教育の課題を捉えるように学修内容を組み立てていきたいと考えている。本学幼児教育学科は保育者の養成校であり、筆者は先に示した教育方針、保育・教職実践演習の授業内容の方向性、幼児教育における現代的な課題等に鑑みて、学生の学びに小学校教育に触れる体験活動を是非とも取り入れたいと願った。折しも、本学の所在地、大阪市阿倍野区と学校法人大阪キリスト教学院は 2017(平成 30)年 3 月に包括連携協定を締結した。そのため、区の教育施策の一つである学校支援ボランティア活動と兼ねて小学校での体験活動が計画できるように、阿倍野区役所に協力を求めて準備を進めることとした。本研究では 2018(平成 30)年度、後期授業である「保育・教職実践演習」を受講した学生の小学校体験活動の振り返りレポートにおける「取り組みの自己評価と幼稚園教諭を目指す者としての課題」の項目の記述を分析し、個々の学びを捉え授業内容の成果を検討することを目的とする。学生の学びを捉え、授業内容としての本活動の成果を把握することで、保育者養成の視点から今後の授業展開に必要な事柄や目指す方向性はいかなるものなのかを検討したいと考えている。なお小学校体験活動(阿倍野区学校支援ボランティア、以下：小学校体験活動と記述)の授業での学びの目的は

- ・小学校での児童の学びと生活に触れる。

- ・ 幼児教育と小学校教育の接続の視点で自分なりの問いや課題を持つ。
- ・ 積極的に地域貢献に取り組む態度を養う。

とした。

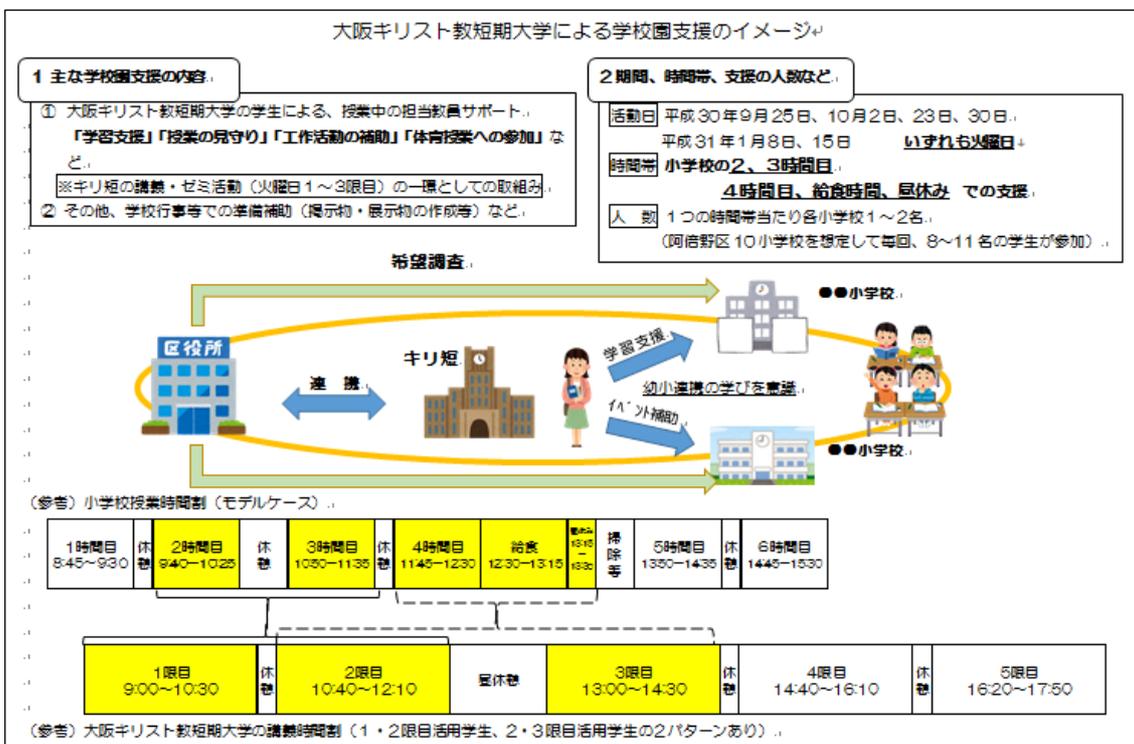
上記の 2 番目の目的を踏まえて、本研究の仮説を「学生は小学校での直接体験活動を通して、保育者を目指すものとして幼小接続についての自分なりの様々な課題を見出す」として振り返りレポートの記述内容の分析を行う。なお、本仮説は筆者の本活動における学生の学びに対する願いでもある。

### 3. 研究の経緯と方法

#### (1) 小学校体験活動の実施の経緯

本活動の計画に当たっては大阪市阿倍野区が募集している「阿倍野区学校支援ボランティア人材募集事業」と本科目の内容とする小学校体験活動が一体化するような取り組みができないかと、区担当部署の職員と打ち合わせを進めることとした。活動の可否や手順等の打ち合わせを重ねた上で、区役所側担当者が以下に示す資料 A 等を作成し、区内の 10 小学校に配布、小学校に支援の希望調査を行った。それに合わせて、ボランティア希望のある、あるいは小学校体験活動の受け入れが可能である 7 小学校を対象に本学の保保育・教実践演習受講学生との人数調整を行った。一方、筆者は学内会議にて学生の学外活動についての説明、授業時間と続くゼミの時間使用の協力依頼と了承を得て個別の学生配属の調整を行った。

【区役所作成資料 A】



## (2) 研究の方法

学生は個々に、小学校での教師の指導や児童についての気付き、及び自分自身の関わりの両方の視点から自分なりの目標を立てて活動に参加した。また、授業で配布した活動後の振り返り記入用紙によって、体験したことについての考察を深めることとした。記入用紙では「学生の活動目標」「児童の活動内容」の他、自身の参加を考察する項目として「児童の活動からの気付き」「幼小連携の視点からの考察」「取り組みの自己評価と幼稚園教諭を目指す者としての課題」の記述項目を設けて各自が本活動を振り返る機会とした。

本研究は「保育・教職実践演習」の授業において学生が小学校体験活動を行った後に作成した振り返りレポートにおける「取り組みの自己評価と幼稚園教諭を目指す者としての課題」の項目について学生が小学校体験活動によってどのような課題を捉えてきたのかを記述から分析するものである。

### ① テキストマイニングについて

今回、分析に際しては、テキストマイニングソフト (KH Coder3)<sup>14</sup>を用い、91名分の学生の項目「取り組みの自己評価と幼稚園教諭を目指すものとしての課題」の記述内容について、句読点ごとに一文ずつデータ化を行い、合計 572 文のテキストマイニングを行った。すなわち、記述からどのような語句が多く出現しているのか、またどのような語と語と一緒に出現しているのかについて共起ネットワークでの出現パターンを明らかにする。共起ネットワークとは KH コーダーによってテキスト型データの中から語を自動抽出し、語と語の結びつきを探るために、リストアップされた語を用いてネットワーク図を描くものである。関連が特に強い語同士を線で結んでいる<sup>15</sup>。

今後幼児教育でさらに重視されていくであろう幼小接続を視野に入れた際に、小学校体験活動によって学生は何を感じ取ってきたのであろうか。振り返りレポートに多く出現した語を中心に分析することによって、学生の学びを明らかにする。

### ② 倫理的配慮

本データの使用に関しては、個人名を伏せたうえでの紀要発表、研究会での使用の可能性について、記述用紙の授業回収時に学生に説明し同意を得ている。また学生記入の振り返りレポートは個人名を伏せて活動に協力いただいた小学校毎にコピーを提出し、共有した。そのうえで、学生記述の研究使用については各小学校に活動終了後のアンケートを送付した際に使用可否の返答を頂いている。本研究にあたっては、研究使用の許可のあった小学校の資料のみを使用している。

#### 4. 結果と考察

表 5 出現数の多い語と出現回数

順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数
1	子ども	262	51	見守る	13	101	掃除	7
2	思う	131	52	持つ	13	102	動く	7
3	小学校	73	53	違う	12	103	勉強	7
4	幼稚園	67	54	多い	12	104	役割	7
5	時間	65	55	注意	12	105	立つ	7
6	先生	64	56	遊び	12	106	それぞれ	6
7	関わる	62	57	教室	11	107	意識	6
8	自分	54	58	参加	11	108	楽しむ	6
9	感じる	53	59	出来る	11	109	慣れる	6
10	大切	52	60	成長	11	110	緊張	6
11	保育	52	61	促す	11	111	決める	6
12	見る	50	62	難しい	11	112	見つける	6
13	授業	43	63	友達	11	113	戸惑う	6
14	声	41	64	幼児	11	114	好き	6
15	考える	37	65	休み	10	115	今回	6
16	積極	33	66	工夫	10	116	座る	6
17	必要	30	67	指示	10	117	支援	6
18	言う	29	68	準備	10	118	実習	6
19	教諭	28	69	身	10	119	取り組む	6
20	姿	27	70	短い	10	120	手	6
21	児童	27	71	保育園	10	121	初めて	6
22	活動	26	72	良い	10	122	書く	6
23	少し	26	73	話す	10	123	説明	6
24	小学生	25	74	意見	9	124	対応	6
25	伝える	25	75	作る	9	125	大きい	6
26	運動会	24	76	集団	9	126	男児	6
27	援助	23	77	集中	9	127	入学	6
28	課題	23	78	人	9	128	発達	6
29	たくさん	22	79	大人	9	129	ボランティア	5
30	目指す	22	80	担任	9	130	ルール	5
31	話	22	81	読む	9	131	一人ひとり	5
32	学ぶ	21	82	付ける	9	132	楽しめる	5
33	教える	21	83	連携	9	133	環境	5
34	言葉	21	84	気づく	8	134	観察	5
35	行う	21	85	気持ち	8	135	基本	5
36	行動	21	86	競技	8	136	嬉しい	5
37	遊ぶ	21	87	教育	8	137	気	5
38	話しかける	21	88	経験	8	138	興味	5
39	生活	20	89	算数	8	139	子	5
40	知る	20	90	自身	8	140	初め	5
41	一緒	19	91	質問	8	141	小学	5
42	困る	18	92	周り	8	142	上がる	5
43	入る	18	93	習慣	8	143	進める	5
44	様子	18	94	目	8	144	園工	5
45	行く	17	95	問題	8	145	先	5
46	聞く	17	96	いろいろ	7	146	全員	5
47	理解	17	97	改めて	7	147	早い	5
48	楽しい	16	98	給食	7	148	相手	5
49	前	14	99	自ら	7	149	他	5
50	関わり	13	100	実際	7	150	体育	5

学生の記述をデータ化した全 572 文を KH コーダーで処理し、表 5 「出現数の多い語と出現回数」では出現数が多い上位 150 語を一覧にしたものである。黄色マーカー部分は本稿において、後段にて、検証するために主に取り上げた語である。

データについて共起ネットワーク描画を試みたものが、図 1 「取り組みの自己評価と幼稚園教諭を目指すものとしての課題 共起ネットワーク(中心性)図」である。ここでは 60 語(node)、101 の共起関係(edge) が描かれている。密度(density)は.057 である。「密度とは実際に描かれ得ている共起関係の数を、存在しうる共起関係(edge)で除したものである。」<sup>16</sup>

なお学生記述からデータ化する際には例えば「子供」と表示した学生は「子ども」としてできるだけ統一して入力

しているが、順位 139 の「子」の表記等、意味が類似した語がある場合がある。同様に 6 「先生」、19 「教諭」、80 「担任」は入力時の言葉が違っているが、同じ意味を示す場合もあるがそのまま入力している。本研究での分析は同じ意味を示すものであっても出現数の多い語の分析を中心として行い、共起関係を検討する。

#### ①図 1 「取り組みの自己評価と幼稚園教諭を目指すものとしての課題」 共起ネットワーク(中心性)図から

図 1 の共起ネットワーク図では円が大きいほど当該語句の出現数が多いことを示す。また青色系は中心性が高いと言えるものであり、黄緑からオフホワイトになるにつれて低くなる。ここでは「子ども」の記述の円が大きく、青から水色系であり、最も中心性が高いことを示す。頻出語と共起関係を図から読み取れる主な事からは以下の通りである。



②図2 「子ども」の記述の共起ネットワーク(サブグラフ)から

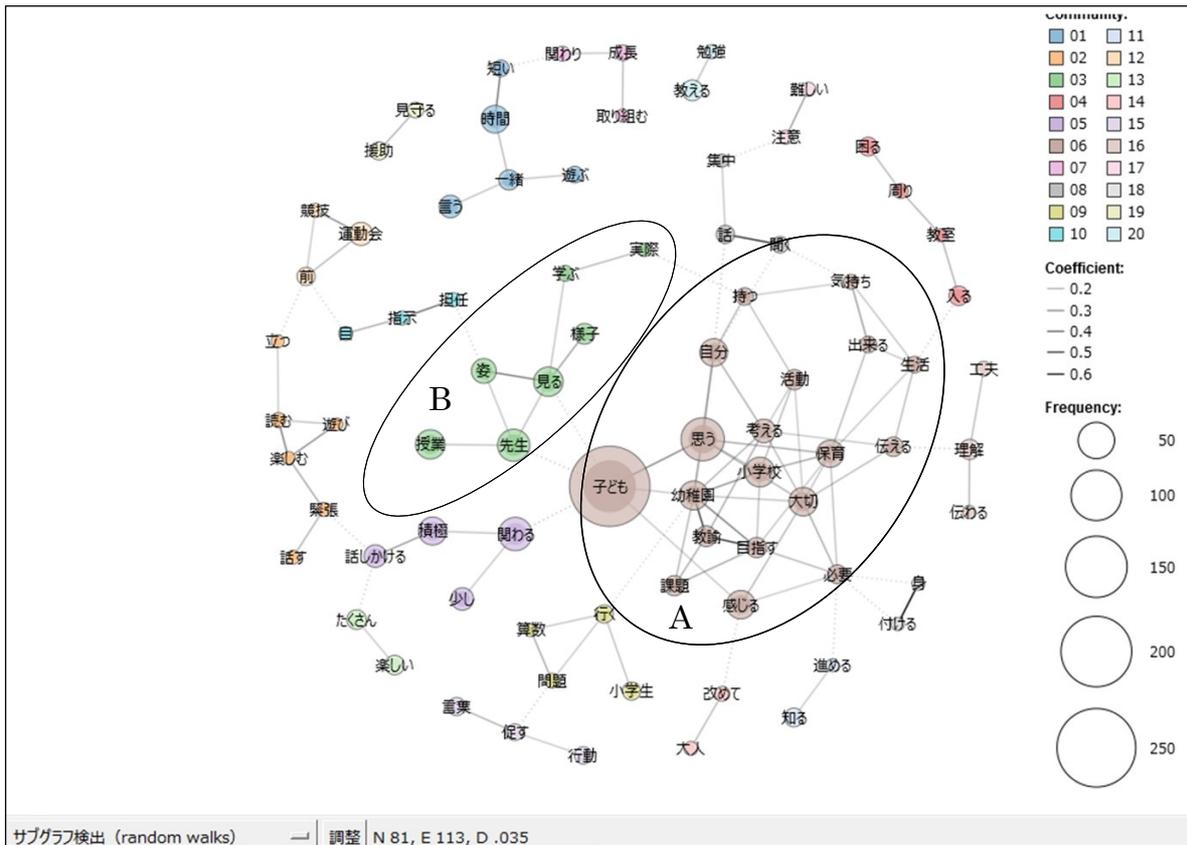


図2 「子ども」の記述の共起ネットワーク(サブグラフ)

図1の共起ネットワーク(中心性)の分析では「子ども」が抽出語の中で、一番多く出現した。筆者はテータの中から「子ども」について記された203文について、KHコーダーによって共起ネットワークのサブグラフ(random walks)検出を行った。サブグラフとは、「比較的強くお互いに結び付いている部分を自動的に検出してグループ分けを行い、その結果を色分けによって」<sup>17</sup>示したものである。なお色分けは自動処理によるものである。図2では「子ども」の語を中心に実線や破線でネットワークが広がっている。ここでは学生の観察や関わりの対象が子どもであることが読み取れる。本分析では語(node)の数が81、共起関係(edge)が113、密度(density)は.035である。中心的な「子ども」と比較的強く結び付いているものがカラーナンバー06として分類されている。これを領域Aとして楕円で括った。このエリアでは、「子ども-幼稚園-教諭-目指す」「子ども-思う-小学校」「大切-必要-感じる」等のつながりから、授業レポートについて学生が記述し、幼小の比較や接続についての課題に向き合って、大切な事や必要な事は何かを考察していることが伺える。この点は図1での分析と同様である。Bの領域では小学校の「先生」の行う授業を実際に見ることで学びがあったことが読み取れる。その他色分けされた各グループでは「教える」「遊ぶ」「話す」「話しかける」などの関わりの様子、「積極」「緊張」「楽しい」

等の言葉に現れるように個々の学生の関わりの心情を読み取ることができる。

### ③「幼稚園教諭を目指す者の課題」についての気づきの視点から

学生は本体験からどのような課題に向き合っているのかについて探るために、[大切][課題][必要]の語を選んだ。これらの語句の含まれる記述 83 文について、共起ネットワーク(中心性)を作成した。なお、語(node)の数が 39、共起関係(edge)が 102、密度(density)は.138 である。(図 3)

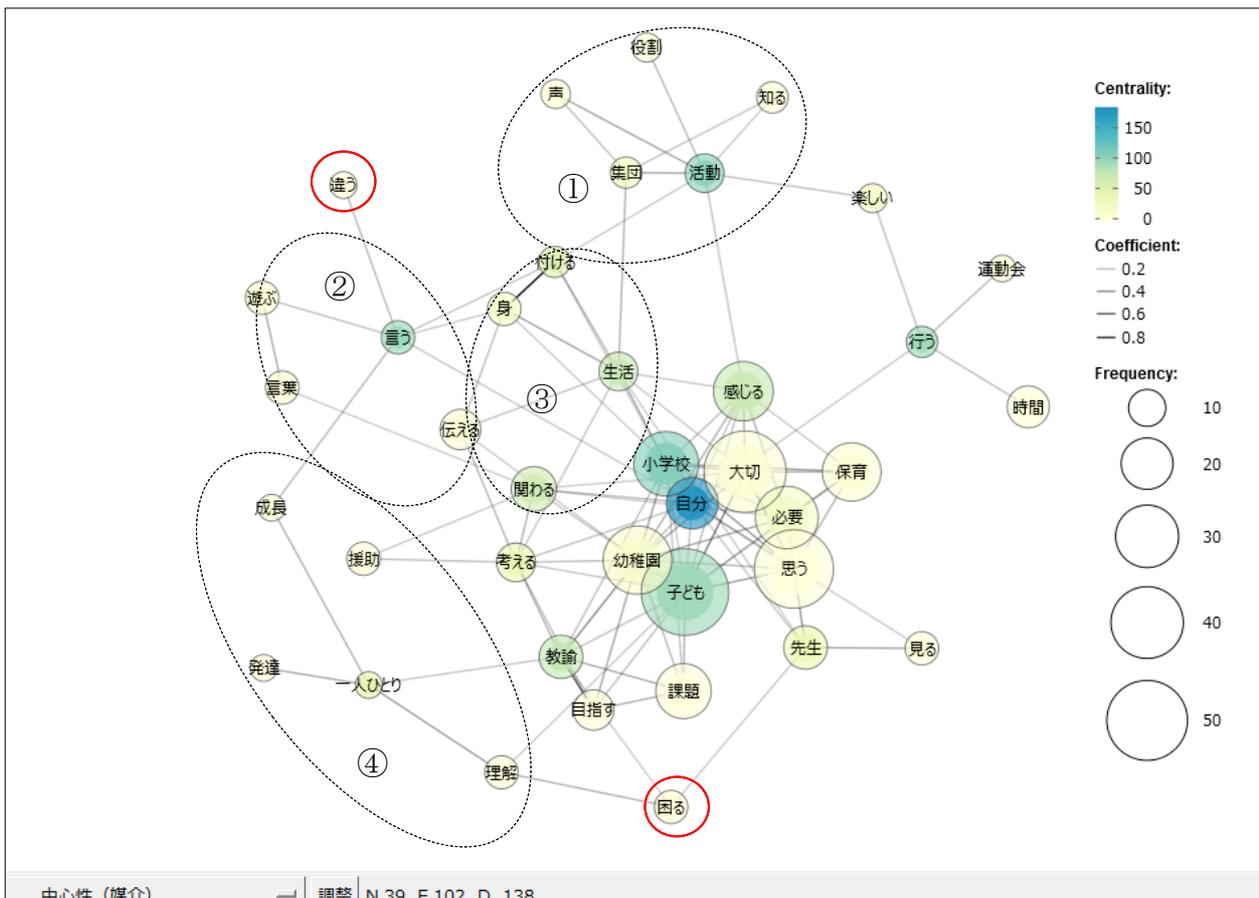


図 3 「大切」[課題][必要]の記述の共起ネットワーク(中心性)

[自分]が青色で示されているために最も中心性が高い語句である。他にも[子ども][小学校][活動][行う][言う]等の中心性が高く青色から緑色を示しており、自分が子どもと積極的に活動しようとしている姿を読み取ることができる。他にも[生活][関わる][感じる][幼稚園][保育][大切][必要][思う]等が共起されている。

筆者が図 3 の点線楕円で囲んだ①からは[集団-活動][活動-役割][活動-楽しい]等、小学校での集団活動のあり方を学生が捉えていることが読み取れる。②は[言葉-関わる-伝える]、③は[生活-身に付ける]、④は[一人ひとり-成長-発達理解]等が共

起されている。小学生としての集団生活の中にあっても、個々の子どもの発達理解や生活を捉えた指導がなされていることに気付いていることを読み取ることができる。

筆者が赤丸で囲んだ「困る」「違う」の意味を示すものについて共起ネットワークからは意図がつかみにくいため、個々の学生が記述した文章から意味を探っていくこととした。そこで学生の記述から、[大切][必要][課題]に加えて、「困る」「違う」の語が含まれた文章を引用し、本活動における学生の気付きや課題を考察する。

ここではKHコーダーの「KWIC コンコーダンス」(Key Words in Context ないしはコンコーダンス) 機能を活用する。コンコーダンスとは「分析対象ファイル内で抽出語がどのように用いられていたのかという文脈を探ることができる」<sup>18</sup>機能である。この機能を使って確認した学生の記述の一部を以下に掲載する。なお文章や文法上の誤りも見受けられる場合があるが、そのまま掲載している。下線は筆者が追加した。

#### a. 「困る」の語についての学生記述から

「図工の時間で、困り感のある子どもが電車が好きだということと、頭がいっぱいになってしまうと、全部放り投げてしまうので、一度落ち着かせてあげられるように、声をかけることが大切だと理解することができた。」「課題としては、小数点の計算で困っている子どもにどのように説明したら理解してもらえるのか悩んだ。」と困り感のある子どもの援助を行った際の感想であった。一方「未来のことも考え、小学生になっても困らないように生活習慣を整え、小学校の先生との情報交換をしながら援助していくことが大切だと思います。」「幼稚園教諭を目指す者として、子ども一人ひとりの個人差を理解し、困ったときに自分で周りの大人に助けを求めたり、質問できるように子どもを育てる必要があるのではないかと感じました。」と具体的に幼小の連携をどう保育で実践していくかについての考察があった。

#### b. 「違う」の語についての学生記述から

「保育者として、小学校との教育方法や指導法は大きく違うと感じましたが、小学校教育へもつながるような保育が園では必要になるとわかりました。」「幼稚園とは違うけれど、一つ一つのルールをきちんと作り、言葉掛けだけで促すことや、視覚的にわかりやすく伝えたりする事は、子どもたちには大切なことなので、真似しようと思った。」「幼稚園、保育園と小学校では全然違うので、それに少しでも慣れるように、幼児期からまず基本となる生活習慣をしっかりと身に付けることがとても大切になってくると感じた。」「幼稚園とは違い、自分の机があり、ノートがあり、毎回何度も同じことを言うてくる先生はおらず、自分で準備しなければならないという大変さが、1年生ではあるのだと感じ、幼少連携の

必要性を感じました。」など幼稚園と小学校での教育内容、環境、指導方法の違いを捉え、そこから幼小接続をどのようにしていくのかの課題を認識している。

c. 「大切」の語についての学生記述から

学生は小学校では何が「大切」と言っているのか、学生の記述の一部を引用する。

「小学校は時間やルールなどの決まりが明確にあるので、幼児期の頃からはじめをつけて生活できるように保育していくことが大切であると感じた。」「体育の前に体操服に着替えたり、体育の後に手を洗ったり、先生が一言伝えるだけで、子どもたちが動いていたので、生活習慣が身に付くよう促すことが何より大切だと思いました。」「集団生活のルールや社会性を身に付ける事は、小学校以降もつながっていくと思うので、遊びの中でルールの大切さや友達と協力することを伝えることが課題だと感じました。」「小学校では、集団で協力して動くことや、時間の中で行うことが大切なので、幼稚園でも意識して保育することが必要だと思いました。」「世間では小一プロブレムと言われていますが、子どもたちには適応する力があると言っても、不安と背中合わせの中、楽しく成長していくためには、私たち保育者が小学校と連携をとり、少しでも子どもたちが安心して活動できるようにすることが大切だと感じました。また、園では保育者が掃除をしますが、興味がある子どもには掃除道具の使い方を楽しく身に付けられるようにしてあげられたらより良いと思いました。」「静かに保育者の話を聞く」、「遊ぶ時は遊ぶ」、「友達を思いやり、関わっていく」など、大切なことを小学校に入学するまで何度も何度も言葉をかけ、援助していくべきであると思いました。」

記述内容はすでに教職についている者にとっては教育・保育内容における基本事項であると思われる内容である。本学学生が幼稚園・保育所等の実習経験、及び今回の小学校体験活動によって幼小接続について、具体的なイメージを以て気付きを得る姿が捉えられる。これらの気付きを保育者として是非活かしとほしいと期待するところである。

d. 「必要」の語についての学生記述

本活動では学生は何について「必要」と感じているのか、一部の学生の記述を引用する。

「小学校では、集団で協力して動くことや、時間の中で行うことが大切なので、幼稚園でも意識して保育することが必要だと思いました。」「幼稚園教諭を目指す上での課題は、小学校で必要な集中力を幼稚園の間に遊びの中でつけるようにすることです。」「保育者を目指すものとして、子どもたちが小学校生活を送っていく中で必要な(社会に出たときに必要な)集団生活や、他の人と協力すること、整列することなどができるようになるため

に、声をかけ見守っていくことが大切だと思いました。」「保育者として、子どもと関わる際に小学校に向けて考えることも大切ですが、そればかりでなく、子どもにどんな人になってほしいというような願いをもち、長い目で関わって行きたいと思いました。また、幼稚園での姿や、好きなこと苦手なことなど具体的な様子をきちんと伝えることも大切なポイントになると改めて実感しました。そのために、日々子どもをよく見るということが必要だと思います。」

以上の記述から、学生は小学校での教育形態等と幼稚園教育の違いを感じながら幼小の接続に向けて何が必要か考えていることがわかる。それだけではなく根本的な幼児教育そのもののあり方を自分に問いかけ、何が必要であるかの考察につながる記述が見られた。

#### e. 「課題」の語についての学生記述

学生は本活動から何を自身の「課題」としたのだろうか。記述では上記「大切」「必要」と重なる文章があるが、類似した内容のものを除き、異なった意味合いの記述を以下に選んだ。

「幼稚園教諭を目指す者としての課題としては、子どもたちが小学校に上がる上での力を身に付けられるように、集中して話を聞けるよう声かけをしたり、自分の意見を持ち、相手に伝えられるよう見守っていくことや、活動を考えることが大切だと思いました。」

「幼稚園教諭を目指す者としての課題は、遊びを提案することがあまり得意ではないので、もっとたくさんの遊びを知っていけないと感じました。」「休み時間の際、子どもから話しかけてくれる子どもとばかり話してしまい、話せなかった子どもも少しいるので、もう少し積極的に子どもと関わっていくことが、幼稚園教諭を目指す者としての今後の課題だ。」「課題は先生(保育者)からの指示だけではなく、今この状況を見てどのような役割が足りていないのかを自己判断し、「こうしたほうがいいですか？」と自分から役割を求めることが、必要になってくるのではないかと思います。」「課題は、一人一人の子どもと向き合っただけで子どもが自分に自信を持って、小学校に行けるように幼稚園生活の毎日に関わりたいと考えた。」

以上では、小学校体験活動に参加したことによって実践現場でできなかったことや不十分と感じたこと等、自分なりの課題が生じたことに対する気付きである。これらが今後、保育者としての在り方に活かされることを願いたい。

#### ④まとめ

先に掲げた本活動の学びの目的「・小学校での児童の学びと生活に触れる。・幼児教育と小学校教育の接続の視点で自分なりの問や課題を持つ。・積極的に地域貢献に取り組む

態度を養う。」については、学生の振り返りレポートの分析からほぼ達成することができたことが捉えられた。また本研究の仮説「学生は小学校での直接体験活動を通して、保育者を目指すものとして幼小接続についての自分なりの課題を見出す」については、体験によって具体的に様々な気づきや自分の課題が見いだされたことが読み取れた。さらに幼稚園教育要領等に示される幼小接続を見据えた場合、資質・能力の育成が保育内容ではどう展開されなければならないのか、教育課程の連携を通じた保育はどう実現しなければならないかの視点が必要である。このことは他授業との連携においても学生が捉えていかなければならない点である。このような視点を持つことが小学校活動経験をより質的に深めることに繋がるのが推測でき、今後の課題でもある。さらに、本活動は学生が1回のみ体験によって得た学びである。小学校側の事後アンケートでは、児童の小学校生活の利益を考慮して、同一学生の複数回ボランティアの要望もあった。この点については本学のカリキュラムマップをどう構築するかを検討も含めて、今後の課題でもある。それらの課題を踏まえつつ、小学校体験活動を意義あるものとしてさらに質的に高めていきたいと考えている。

## 謝辞

・KH Coder の使用に際して、著作権は『社会調査のための軽量テキスト分析』（ナカニシヤ出版、2014年）の著者、樋口耕一氏に属するが、著書にてフリーソフトウェアとして公開されていることを確認の上使用させて頂きました。本研究に使用させて頂きました事に感謝申し上げます。

・小学校体験活動の準備及び実践に際しまして、本計画を協働体制でお受け入れ頂きました大阪市阿倍野区、区長様に感謝申し上げます。また区役所の担当職員様には猛暑の折りに各小学校訪問を共に向ういてくださいました。学生の小学校体験活動(学校支援ボランティア)の計画及び実践のために支えて頂き、ご協力頂きました事に感謝いたします。

・大阪市阿倍野区内7校の小学校の校長先生のご厚意によって、学生に貴重な体験と省察の機会をいただきました。未熟な学生をご指導いただきました各担任の先生、御関係の方々には心より感謝申し上げます。

・最後に本活動に真摯に向き合い取り組み、振り返り記録を作成した本授業の受講学生に敬意を表し、資料として提供してくれたことにお礼を申し上げます。ありがとうございました。

## 引用・参考文献

### 1. 文部科学省 教職実践演習(仮称)について

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1337016.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1337016.htm) (2019)

- 年9月23日)。
2. 同上。
  3. 大阪キリスト教短期大学幼児教育学科シラバス 保育・教職実践演習(幼稚園)  
[https://portal.occ.ac.jp/Kyoin/web/Syllabus/WebSyllabusKensaku/UI/WSL\\_SyllabusKensaku.aspx](https://portal.occ.ac.jp/Kyoin/web/Syllabus/WebSyllabusKensaku/UI/WSL_SyllabusKensaku.aspx) (2019年9月23日)。
  4. 大阪キリスト教短期大学「幼児教育学科(2019年度用)教育目的」『2019年度 大阪キリスト教短期大学 要覧』、大阪キリスト教短期大学編 2019年、39頁。
  5. 同上、40頁。
  6. 前掲 1.ホームページ 文部科学省 教職実践演習(仮称)について。
  7. 同上。
  8. 文部科学省「序章 第1節 改訂の基本的な考え方」文部科学省編『幼稚園教育要領解説』、フレーベル館、2018年、参照。
  9. 文部科学省「第2節 幼稚園教育において育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」」、文部科学省編『幼稚園教育要領解説』、フレーベル館、2018年、参照。
  10. 文部科学省「第2節 幼稚園教育において育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」」、文部科学省編『幼稚園教育要領解説』、フレーベル館、2018年、50頁。
  11. 文部科学省「付録 保育所保育指針」、文部科学省編『幼稚園教育要領解説』、フレーベル館、2018年、352頁。
  12. 文部科学省「付録 幼保連携型認定こども園教育・保育要領」、文部科学省編『幼稚園教育要領解説』、フレーベル館、2018年、324頁。
  13. 文部科学省「付録 小学校学習指導要領(抄)」、文部科学省編『幼稚園教育要領解説』、フレーベル館、2018年、307頁。
  14. 樋口耕一「テキスト型データの計量的分析」、樋口耕一『社会調査のための軽量テキスト分析』、ナカニシヤ出版、2014年、参照。
  15. 同上、「資料A KH Coder リファレンス・マニュアル」、参照。
  16. 同上、158頁 - 159頁。
  17. 同上、160頁。
  18. 同上、143頁。

## 注

1. 本シラバスは2019年度入学生の例示である。本研究対象の2018年度入学生シラバス作成時期には小学校体験活動実施の対外的な調整中であったため、「授業の概要」には活動名そのものは明記していない。